

Focus



CLASSROOM REPORT 教室レポート

高殿教室、ようやく開講。
大変な中、たくさんの方に来ていただき、
本当にありがとうございます。

岡本 泰行 (高殿・関目教室)



▲高殿教室。下は焼き肉・横は牛丼。お肉に囲まれた教室です。

家の近くの公園で桜が咲き始めました。いつものなら「お花見に行きたい!」と思うのですが、コロナウィルスのせいで行くのをためらっています。ですから子供とおとなしく家で遊んでいます。早く外に出て遊びたいものですが、感染が落ち着くまで我慢我慢です。

新しく高殿教室が出来上がりました。教室長の岡本泰行と申します。私も教室長として3教室目となりましたが、焼肉屋さんの上に教室があるのは初めてです。肉の写真が目に入り、肉が頭の中でかなりの割合を占めることもありながら働いております(笑)。新規教室である高殿教室は、スタート時に30名を超える生徒のみなさんに集まってもらっています。ありがとうございます。教室の立ち上げからの度に、生徒の皆さんに通ってもらえるかと心配になります。生徒の皆さん保護者の皆様に満足していただければ常に頑張っていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、新しく教室を作るにあたり、色々なことをしないとイケません。看板を決めたり、部屋の間取りを決めたり。備品をそろえたり、セキュリティ会社を入れたり…。11月の終わりから本格的にいろいろなことを決めていき、年明けに工事がスタートしました。また年末から

は中3の最後の追い込みと、なかなかやんやんな毎日過ぎておりました。

そして、さあこれからというときにコロナウィルス感染拡大で休講になりました。それでもできることがあるということで、学習部の皆さんにはZOOMというアプリでLIVE授業を提供させていただいております。



▲実際にはこんな感じで、誰もいない教室で授業をしていました。

カイチとしては録画ではなく、双方向でわかりやすい授業を配信したいという考えでZOOMを採用したのですが、当初の黒板を使った授業では、内容が理解しづらく、つまらない…。みんな、どうしようと話し合っ

諸口の高木先生から「パワーポイントを使ったらどうか」というナイス発案があり、そこからは連日、先生達でパワポ作成に明け暮れ、深夜に皆でZOOMを使った模擬授業を何回も行い、スタートにこぎ着けました。

ZOOM授業には、もちろん高殿教室の生徒達も参加してくれています。4月からは実際に顔を合わせて教室の仲間として一緒にがんばりましょう。

最後に私が思っていることは、子供達はなにでもなれるということです。子供達は自信を持つと行動が変わります。行動が変われば結果が変わります。ですから、子供達に「自分は出来る」という経験を多くさせてあげたいと思っております。楽しいことや、しんどいこと、色々あると思います。ですが、一つ一つを一緒に乗り越えていき、よりよい未来を実現できるように精一杯サポートさせていただきたいと思っております。高殿教室が地域になくはならない存在になれるように、職員一同精進して参ります。これからどうぞよろしくお願ひいたします。



▲教室は4つ。広くてきれい!
みなさんの声でぎやかになる日をお待ちします!

Education



KAICHI'S ACTIVITY カイチの教育

求められるのは、“まだ見ぬ課題に挑む力”
日々の積み重ねで、勝利を掴もう!!
～2020年 大阪府公立高校入試の分析と対策～

井上 陽平 (関目教室)

3月11日、大阪府公立高校入学試験が行われました。コロナウィルスの騒動で世間が慌ただしい中ではありましたが、卒業生達は最後の最後までやり抜き、入試に向かっていきました。大阪府をはじめ、全国の入試問題で問われている力は、活用力。知識をただ暗記するだけでなく、その知識を活用してまだ見ぬ問題を解決していく力が問われています。大阪でもこのような問題の出題が増えてきていますが、今年の入試問題では、それらが少し易化していたことが印象的でした。

それでは、各教科の詳しい分析とその対策について見ていきましょう。

<国語>

B問題では、昨年と比べ、少し出題傾向の変化が見てとれました。まず、大問1の漢字・語句の問題で、昨年出題されていなかった文法問題が再び登場しました。また、この大問の中で、漢文の返り点を打つ問題も出題されました。そして、昨年漢文の問題となっていた大問3は、古文の問題に戻りました。これらは決して大きな変化ではなく、難易度も高くはなかったものの、一つの傾向に絞って勉強するのはなく、幅広い分野の問題に対応することの必要性を感じさせられました。また、現代文では、文章のレベルは少し難化したものの、記述問題の字数が減るなどしてバランスが取られていました。普段からわからない語句を調べ、文章の意味をきちんと理解しようと読解能力を磨いていた生徒にとっては、得点しやすい内容になっていたかと思われます。

C問題では、出題形式に大きな変化は見られなかったものの、難易度としては昨年と比較して易化している印象を受けました。最も印象的だったのは、大問5の作文問題。2019年の「遊び」の作文問題は、そもそも資料の内容を読み取ることさえ難しい、抽象的なテーマの問題でしたが、今年の問題は、年代によって同じ言葉の意味が違うニュアンスで捉えられるという、比較的オーソドックスな問題となっていました。また、現代文や和歌の鑑賞文問題でも、昨年と比べれば意味を理解しやすい問題文になっていたかと思われます。国語のC問題では、一風変わった問題が出題されることがよくありますが、今回のように、基礎的な力をもって解ける問題も多く出題されます。B問題も通して言えることですが、まずは基本的な語彙力、読解力、記述力を身に付け、その上で、様々な形式の問題に対応できる応用力を身に付けることが大切であることがわかります。

—国語主任 坪田先生—

<数学>

B問題の出題形式は昨年から大きく変わらず、小問集合、関数、平面図形、空間図形の大問4つの構成でした。特に今年の小問集合、関数の問題は、基本的な問題が多く、確実に得点したいところです。求め方を問う問題が出ましたが、難易度の高い問題ではなかったため、きちんと関数の基礎を固めてきた子にとっては、それほど大きな障害とはならなかったであろうと思われます。しかし、平面図形、空間図形の問題は、複雑な図形の問題が出題され、証明などは少し解き辛かったかもしれません。全体でみると昨年に比べて難化していたと思います。自分が今この長さや角度を求めているのか、状況を整理しながら解く必要があります。これらの図形問題に関しては、苦戦を強いられた子が多かったでしょう。

C問題でも、昨年と比較して、大きく出題形式は変化せず、小問集合、平面図形、空間図形という大問3つの構成でした。昨年の小問集合では、見慣れない標準調査の問題や、

素数がからむ確率の問題など、難易度はさほどですが統計分野に少し目がいきましました。今年の入試ではオーソドックスな小問集合は得点しやすい印象でした。しかし、図形の分野では、図形が複雑な問題が出され、昨年より難化していました。円がよく出題される傾向があるのですが、今年も円がまったく出題されていませんでした。それも今年の大きな特徴だといえます。図形問題では、入試や模試などの様々な問題を解いて、その度にきっちりやり直しをすることで、解法が見つかるようになります。公立C問題のような高難易度の図形問題に挑む力は一朝一夕にはつきません。普段から問題を解いた後のやり直しを徹底していきましょう。

<英語>

今年の入試では、長文問題が6題から5題に減少し、語数も昨年約1550語でしたが、今年約1450語に減少しました。しかし、昨年度の入試問題が超難関で作られていて、今年も多少易化しただけなので、一昨年の問題と比較すればまだまだ難しい。30分の筆記試験で、文法1題、長文5題、自由英作文1題+リスニング問題。リスニング問題は口頭リスニングであるパートCで、「人々の注意をひく宣伝の方法」という昨年より難しいテーマが取り上げられていました。日頃意識することのないテーマである分、より思考力を問われる内容となっていました。入試問題の中でも特筆すべきは、自由英作文です。今年はこちらから出題され、「Nothing ventured, nothing gained.」(虎穴に入らずんば虎子を得ず)、「Better safe than sorry.」(君子危うきに近寄らず、安全第一)のいずれから選択を行い、その選択の理由と自己の経験を書くという内容でした。問題文が長く、内容理解を求められ、論理的な文章力を問われる内容なので、普段から練習をしておかなければ、時間内に全てを解くのは難しかったのでは無いかと思えます。

また、B問題では長文の設問の易化があり、大問3の自由英作文で、昨年と形式の変化がありました。2018年、2019年の自由英作文では、英語で書くべき内容が問題の中である程度指示されており、自分で考えて書く余地が狭かったのですが、今年の問題は、オリンピックの話題であり、質問に対して答える幅が広がったため、自分で適切な答えを考え、ミスがないように英文に直す力が問われました。とはいえ、基礎的な単語力、文法の知識があれば、十分に答えられるような内容であったので、学校の教科書レベルがしっかりと身につけていれば、解ける内容であったように思います。

—英語主任 熊谷先生—

<理科>

大問4問で、生物、地学、物理、化学のそれぞれで大問1つを構成しているのは昨年通りで、小問の数も昨年とほぼ同じです。問題文の総量に関しては、ここ2年間(2018年、2019年)とほぼ同量であり、2017年に比較するとやや減少した形で落ち着きました。ただ、40分の制限時間の中ですべて回答するためには、「設問を先に読み、解答に必要な情報を整理し、問題文中から探し出す」という手順に慣れおかなければなりません。

全体的には、2017年は小問数が多いうえに計算問題の割合が高く、非常に難度が高い試験であったことに比べると、2018年からの3年間は計算が減少し、記述がやや増加、総合的な難易度は下がった形で落ち着いています。そ

の中で今年は、教科書内の発展的な内容からの出題がやや増加しました。また、受験生にとって初めて目にする状況に対し、情報を与えて解かせる、思考力を問う問題の出題が続いています。

普段の学習においては、①語句の意味を正確に把握する、②公式を、意味がわかっている状態にする、③典型的な記述問題は暗記、また端的に答えられるようにする、④計算問題では「最終的に求めたいもの」を把握し、逆算する練習をする、という点に注意して取り組むべきと考えます。また、地球誕生から46億年経過していることを知らなければ解けない問題のように、教科書の図表中に書かれた細かい具体例からの出題も続いているので、具体例や数値など、細かなところまで目を当てていくことも大切です。また、私立入試対策を通して、初見の知識やグラフを読み解く力も養成する必要があります。

—理科主任 小幡先生—

<社会>

昨年は公民の出題数が多く難化しましたが、今年も地理歴史が中心となり易化しました。資料読み取りの問題も落ち着いて読めば正解することは十分に可能です。文章量も例年よりも少ない印象でした。しかし、地理では小麦の生産量の多い国名や都道府県名を問う問題、歴史では公立入試や模試では出題されることが極めて少ない問題が出題されるなど、教科書、資料集を隅々まで学習しておかないと80点以上は難しいと思われます。

地理歴史は主に中学1年から2年生1学期までの範囲が多く出題されました。中学1年生、2年生は学校ワーク、必修テキストをよく復習しておきましょう。中学3年生では主に公民を学習し地歴を勉強する時間は短くなるため、地歴は中学2年生生まで極めるつもりで学習しましょう。

中学3年生ではウィンパスの確認問題や入試問題、模試を解いたら、教科書を開いての復習を徹底しましょう。特に歴史は出来事のつながりを意識することで、歴史特有の並び替えの問題に強くなります。つながりが分からない場合は先生に質問しましょう。2学期には学校では公民一色になりますが、秋の模試で出題される公民の割合は1/4程度にすぎません。地理、歴史の仕上がりが秋の成績を大きく左右します。夏の終わりにまでに地歴を仕上げるつもりで頑張らなう。

—社会主任 高木先生—

<まとめ>

前述のように、今年の大阪府の入試問題では、活用力を問う問題が若干易化していました。それでもやはり他府県と比較すると難易度が高く(特にC問題)、急激に傾向を変えることもしばしばあり、油断はできません。ただ、そのような高難易度な問題に対しても、まず大切なのは基礎・基本の見直し。難しい形式の問題に目を奪われず、足元がおろそかになってしまったりは、元も子ありません。コツコツと積み上げてきた努力で基礎を築き、その上で、得た知識を活用する力を身に付けていきましょう。

この記事を読んでくださっているカイチ生・保護者のみなさん。小学生や中学生であっても、今コツコツと積み上げ、学んでいることが、入試へ立ち向かうための素地を作っています。普段の授業や宿題、小テスト、お稽古を、真面目にきっちりやり抜くことが、苦しい受験勉強、難しい入試を乗り切るための底力に繋がっているのです。今日の学習に意味を見だし、できることを少しずつ、でも確実に積み重ねていきましょう。 —記事編集 まで井上陽平—